

カマキリの卵鞘と越冬

(写真・文 吉岡義雄)



写真(左上):オオカマキリの卵鞘。柔らかいスポンジ状の物質の中に100以上の卵が産み付けられる

写真(左下):コカマキリの卵鞘。オオカマキリと比較して長細く、小さい

写真(右):雪解け後、倒れていたセイタカワダチソウから採集した卵鞘からオオカマキリの幼虫が孵化した

低温、降雪、餌の少なさ。冬は昆虫の活動には適さない季節です。この厳しい季節の乗り越え方は種により異なり、様々です。

北海道から九州にかけて分布するカマキリの仲間の多くは卵で越冬します。カマキリの卵の特徴として、スポンジ状の物質で複数の卵を覆う構造になっていることがあげられます。これを卵鞘^{らんしやう}といい、中の卵を乾燥や衝撃などから守る働きをしています。卵鞘の形態や1個あたりに産みつける卵の数は種ごとに異なります。

さて、只見で卵鞘を目にする機会が多いのはオオカマキリでしょう。大きく膨らんだ形態が特徴的で、卵鞘1個あたり100以上の卵を産み付けます。本種は、積雪量を予測し、雪に埋もれない高さに産卵するという民間伝承がありますが、これは間違いです。実際には卵を産みつける植物の枝葉の生え方や茎の太さなどの条件で産卵場所を選び、それによって卵鞘の高さも変わります。産卵する植物は草本から樹木まで数多く、雪に埋もれてしまうような植物も含まれます。しかし、卵は雪に埋もれてしまった場合でも雪解け後には問題なく孵化することがほとんどです。

只見にはコカマキリという種も生息しています。中型の地表性のカマキリで、9～10月に道路上を歩く姿がよく見られます。卵鞘はオオカマキリのものとはっきりしており、違いは一目瞭然です。本種はオオカマキリと異なり、石や倒木の裏など、人目につかない場所に産卵するため、意識して探さないと見つかりません。家屋の外壁、コンクリートブロックなどの人工物に産み付けられた卵鞘は比較的目につきやすいので、探してみるとよいでしょう。

只見町プラセンターからのお知らせ

只見町プラセンター附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」では下記企画展を開催中です。皆様のお越しをお待ちしております。

企画展アーカイブ「只見の天然資源とその利用～冬の暮らしと手仕事編～」

会期:2020年12月19日(土)～2021年3月29日(月)

場所:ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー